

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

社会 第119号

—小学校・特別支援学校対象—

平成24年10月発行

子どもが自ら追究する社会科の学習問題づくりの工夫

社会科の授業においても、自ら問題を追究し、解決する力を備えた子どもを育てることが求められている。そのために、教師は、「追究したい」という強い問題意識を子どもにもたせなくてはならない。さらに、子ども自らが問題を発見し、それを学習問題にまで高めていけるような授業を展開していかなくてはならない。

しかし、子どもに何の必要感ももたせないまま教師が学習問題を提示する授業や、子どもにほとんど調べさせないまま、もっと詳しく調べてみたいことを発表させるような授業も見受けられる。

そこで本稿では、子どもが自ら追究する社会科の授業にするための学習問題の要件や学習問題づくりの手順、工夫等について詳しく述べることにする。

1 社会科における学習問題づくりの基本的な考え方

(1) 「社会科における学習問題」とは

社会科における学習問題とは、「子ども自身が問題解決しながら小単元のねらいに到達するための問いのこと」で、教師が、子どもとともに設定していくものである。

小学校の社会科においては、一般的に、

小単元の導入で、小単元を貫く学習問題を設定し、それに基づいて子どもが予想を出し合い、追究の柱を立てる。さらに、子どもが、追究の柱を調べ、解決していく過程においても、より焦点化された学習問題を設定していくことになる。

(2) 「社会科における学習問題」として成立するための要件

社会科の学習問題づくりでは、まず、教師が社会的事象を教材化して、それを子どもの前に意図的に提示する必要がある。その際、学習問題として成立するための、次のような要件を満たしているかに留意する必要がある。

- ア 小単元や本時の目標を達成できるものであること
- イ 社会的事象の観察や調査、資料活用、体験的活動等に基づいて生み出されていること
- ウ 子どものやる気を引き出すことができること
- エ 子どもなりの予想を立てることができること
- オ みんなで知恵を出し合う必然性があること

アについては、当然のことであるが、子どもが、学習問題を追究していくと、おのずと目標を達成できるものでなくてはならない。しかし、実際の授業では、

なかなかできていないことが多い。そこで、まずは、教師自身が、授業のねらいと学習問題は表裏一体の関係にあるということ認識し、子どもとともに設定していくという意識をもつ必要がある。

イについては、具体的な社会的事象に関心をもち、考察して生み出されたものでなければならない。そのためには、子どもが資料を読み取ったり、教師の発問に基づいて話し合ったり、体験的活動によって気付いたりするような意図的な場面設定が必要である。

ウについては、子どもが「ぜひ調べてみたい」と意欲が湧くような問題意識を醸成するものでなくてはならない。そのためには、子どもに追究していく必要感や切実感をもたせる工夫が必要である。

エについては、子どもが自分なりに根拠をもって予想ができ、それを検証する計画を立てることができるものでなくてはならない。そのためには、子どもなり予想ができ、調べる活動への見通しがもてるような、具体的な学習問題になるように手立てを工夫する必要がある。

オについては、子どもそれぞれがもつ思い思いの問題意識を集約した学級全体の学習問題を追究する中で、友達との考えのずれや葛藤が生まれるものでなくてはならない。そのためには、多様な考えが生まれ、知恵を出し合いながら解決できる適度な困難さを伴う必要がある。

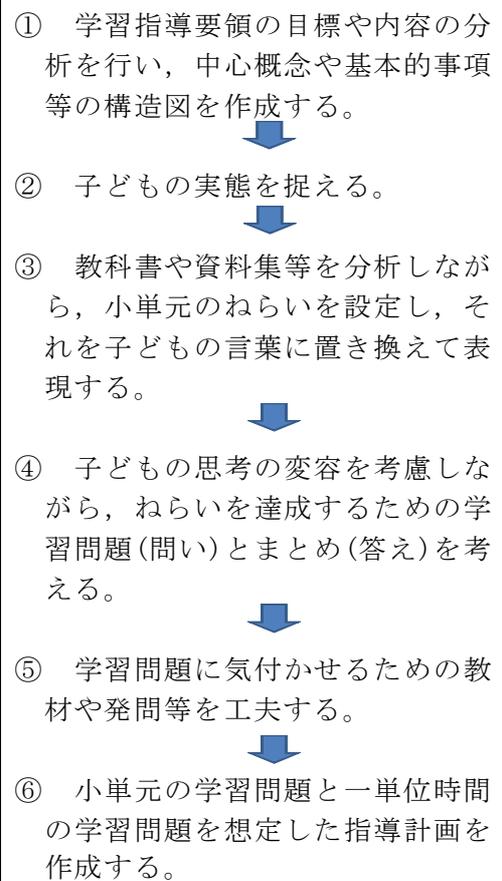
(3) 学習問題づくりの手順例

ア 教師の側からの想定

学習問題は、教師が子どもとともに設定するが、子どもが「これを追究したい」と言った内容が、何でも学習問

題になるわけではない。そこには、子どもの思いや願いと、教師の意図や学習のねらいとの一致が求められる。つまり、教師は、授業の目標に子どもの意識を近づけていけるような教材の工夫をするとともに、子どもの問題意識を醸成していく必要がある。

そのためには、次のような手順で教師の側から学習問題を想定しておかなくてはならない。



これは、手順例であるので、例えば、③の前にねらいをキーワードで表してみたり、⑤と⑥を同時に行ってみたりするなど柔軟に考えてもよい。

イ 子どもの追究心をかき立てる場面の設定例

子どもが自ら問題を発見するためには、まず、教師が次のような場面を意図的に設定する必要がある。

ア 一見矛盾する複数の資料を提示して、子どもに分析させる場面

イ 子どもの考えを出させてから事実を提示し、認識を揺さぶる場面

ウ 困惑、怒り、同情など、子どもの素朴な感情を引き出す場面

エ 子どもの生活経験と体験とのずれを生かし考えさせる場面

オ 子ども同士の考えの違いを対立させ、表出させる場面

子どもは、このような自分の既存の知識や見方・考え方では解釈できないような意外な事実や社会的事象と出会う場面を提示されることで、追究心がかき立てられ、調べずにはいられなくなる。

2 社会科の学習問題づくりの工夫

次に示すAのような学習問題でも、子どもは追究するが、Bのように「なぜ」を核にした学習問題をつくることで、子どもはもっと主体的に学習問題に関わり、自ら問題を追究するようになる。

(1) 人物の共感的理解を深める工夫例

A

〇〇祭りで、人々はどのような思いや願いをもっているのだろうか。

B

実行委員長の□□さんは、なぜ〇〇祭りをこの忙しい時期に続けようとしているのだろうか。

Aは、疑問形で一見調べやすそうな学習問題であるが、子どもが追究した後は、抽象的で一般的なまとめになってしまいがちである。

そこで、人々の願いや努力、工夫などを焦点化して、具体的に調べさせていく

ために、Bの学習問題のように工夫する。そうすることで、子どもの「調べてみたい」という気持ちをかき立て、人物への共感的理解を深め、人間の社会的な営みに気付きやすくなる。さらに、「祭りに関わる他の方々はどうだろう」という問題意識にまで広げやすくなる。

(2) 社会認識をより深める工夫例

A

ごみは、どのように始末されているのだろうか。

B

ごみの始末をなぜ、市の仕事として行っているのだろうか。

Aのような事実を調べるための学習問題では、社会的事象を調べることのみが目的になってしまい、社会的事象の表面的なことを調べ、まとめ、交流するだけで終わってしまうことが考えられる。

そこで、もっと社会の仕組みや働きを認識させるために、Bの学習問題のように工夫することで、社会認識を深め、社会の形成に関わろうとする意識や態度を育てることができる。

(3) 体験的活動を通し、子どもの数量に対する驚きを生かす工夫例

A

聖武天皇は、なぜこのような大仏を造ったのだろうか。

B

聖武天皇は、なぜこんなに大きな大仏を造ったのだろうか。

AもBもそれほど大きな違いはないようだが、Bは大仏の顔などのパーツを作るという体験的活動を通して生み出された学習問題である。

資料等を基に、子どもに抽象的な数字を想起させるだけでも大仏の大きさを捉えさせることはできるが、それだけでは

実感させづらい。教師が「大仏の高さ(約15m)は、どれくらいだろう。」と尋ねても、子どもは、「学校の2階まで。」「10階建てのビルぐらい。」などと曖昧であるので、学校の屋上までの高さを測らせるとともに、大仏の目や耳、口、手のひら、頭の上のらほつ等を実物大で作らせる(写真)。すると、子どもは、「大仏は、座っている姿なのに3階校舎よりも高いんだな。」と、実感を伴った驚きをもつようになる。

Bでは、子どもが大仏の大きさを実感として味わっているので、知的好奇心を刺激され、「なぜ、こんなに大きな」という言葉に実感がこもり、問題意識が高まり、意欲的に追究する姿勢が見られる。



写真 実物大の大仏の製作

(4) 矛盾を含む資料を読み取らせ、子どもに疑問を生じさせる工夫例

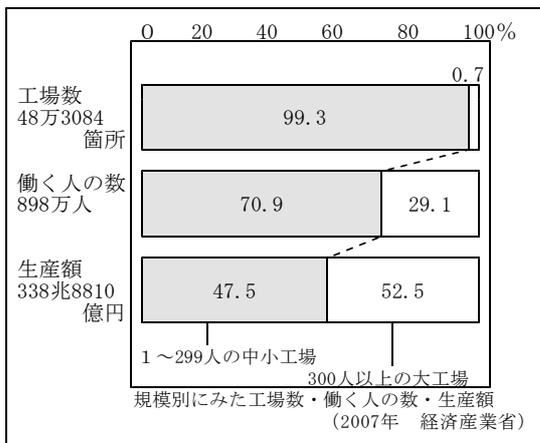


図 子どもに提示したグラフ

A

中小工場の生産額が少ない理由を考えよう。

B

なぜ、中小工場は、大工場に比べて工場数や働く人の数は多いのに、生産額は少ないのだろうか。

Aでは、追究している間に、大工場との関係性を意識しにくい。そこで、図の「1~299人の中小工場」と「300人以上の大工場」という言葉を伏せ、「どちらが大工場だと思うか。」という発問をし、意図的に比較させることで疑問を生じさせ、Bの学習問題をつくっていく。

また、その際「このグラフからどんなことが分かりますか。」と拡散的に発問するのではなく、**「標題や数字を正しく読む」**→**「比較や関係などに着目しながら読む」**→**「疑問や問題をもちながら読む」**というように焦点化した段階的な読み取りをさせていくことが大事である。

学習問題は、子どもに言わせなければならぬとか、教師が与えてはいけないといった固定観念があるようだが、学習問題の設定で重要なのは、子ども一人一人が「考えたい、調べたい」という意識になっているかどうかである。何のために調べるのかという目的意識がないままに、調べたいことを聞いても価値のある学習問題は生まれない。

また、学習問題づくりには、教師の周到な準備が必要である。つまり、子どもが自ら追究するためには、まず、教師自身が問題意識をもち、価値ある教材をつくり、子ども自身に問題を発見させるような工夫をすることが大切である。

〔引用・参考文献〕

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』平成20年、東洋館出版社
- 北俊夫『社会科学習問題づくりのアイデア』2004、明治図書出版
- 山邊文洋『話し合いたくなる課題づくり5つのステップ』2007、学事出版

(企画課)